

歴史体験事業報告「弥生時代の竪穴住居を復元しよう！」

鐘ヶ江 一朗

子供たちが地域の歴史文化にふれる体験学習の機会を設け、文化財の普及啓発に資するため、埋蔵文化財調査センター内で復元・公開している弥生時代の復元住居の建て替えを、「歴史体験事業」として小学校6年生と職員・地元作業員との共同作業で実施した。

この復元住居は、古曾部・芝谷遺跡のS12号住居をモデルとしている。火災にあい土器や鉄器などが原位置で出土するとともに、周壁沿いに板壁を設けていたことが確認された重要な調査例である（『古曾部・芝谷遺跡』高槻市教育委員会1996）。15年ぶり2回目の建て替えにあたり、地域の文化財を地域の材料を使って復元するという位置付けから、屋根葺き材として古来名高い淀川・鶴殿のヨシ（アシ）を使用することとした。そこで鶴殿周辺の小学校に体験参加を呼びかけ、上牧小・北大冠小から6年生・保護者・教諭など約30名の参加を得たものである。

体験参加は4回のべ110名、それぞれガイダンス及び作業員との共同作業体験を組み合わせて実施した。一連の作業はCATV（株）高槻ケーブルネットワークが取材・記録し、事業終了後に企画番組「ぼくらが建てた竪穴住居！」として放映された。児童たちがこの歴史体験事業への参加を機に、文化財や地域の歴史文化をまもる心を育んでくれればと願っている。またヨシ調達及び屋根葺き作業にあたっては、道鶴実行組合の多大な協力を得た。記して厚く感謝する。

1. 竪穴住居の復元作業（図版第13）

モデルである芝谷S12号住居は、一辺約5m、深さ約0.3mをはかる隅丸方形を呈し、主柱穴のほか床面中央に深い1穴をそなえている。従来この中央ピットを棟持ち柱の柱穴とみて上屋の復元を行っていたが、今回、同ピットは灰穴炉であるとの認識から棟木の支持方法を改め、垂木の一部に長材を用いて叉首を組み、棟木を受けることにした。

復元住居の規模は、外寸（軒先）で一辺約8m、高さ約4.2mをはかる。主柱と桁・梁の結合は、主柱上端を桁材に合わせてえぐり、そこへそれぞれ端部を半欠きした桁・梁をのせてある。屋根は煙出しを両妻に設けた入母屋造りとし、ヨシで段葺きをほどこした。屋根勾配は約45度である。垂木下端は地面で受け、杭で固定した。棟は杉皮を葺き、半裁の竹でおさえている。煙出し開口部は割竹を垂木に固定して鳥除けとしている。入口は平側に設け高さ約1.6m、屋根は両流れで棟は半裁の太竹でおさえた。側壁は柱間にヨシを立て、割竹で挟んで固定した。また筒竹を軸受けとして扉を取り付けた。

床面は隅丸方形で一辺約5m、見学者の安全等を考慮して掘り下げは0.1mにとどめた。周囲には板壁をめぐらし、中央に木灰と川原石で炉を表現した（図1）。

作業にあたり、木組みや屋根葺材など使用資材は一新した。また部材の結合には強度を考慮して釘・番線等を使用して緊結のうえ、荒縄・棕櫚縄で隠してある。本来用材にはアラカシなど周辺に生育する樹種を選定し、主柱には又木、板には割板を使用すべきところであろうが、調達の便から皮付き杉丸太・杉挽き板を使用することとした。

今回調達、使用した資材は次のとおりである。

- ・皮付き杉丸太
L3.0m- ϕ 16cm、8本<主柱、梁・桁>
L3.0m- ϕ 6 cm、2本<主屋根棟木・入口棟木>
L5.6m- ϕ 8 cm、5本<棟持ち垂木>
L4.0m- ϕ 8 cm、23本<垂木>
L2.0m- ϕ 8 cm、8本
<棟廻り・入口支柱>
L2.0m- ϕ 4 cm、34本
<主屋根横木・入口垂木>
- ・杉先付け杭
L1.5m- ϕ 6 cm、28本<垂木固定>
L1.5m- ϕ 4 cm、20本<板壁固定>
- ・杉板
L1.8m×w25cm×t1.2cm、80枚
<板壁>
- ・ヨシ 500束
(一束L2.5m- ϕ 15~20cm)
- ・丸竹 L4.0m- ϕ 10cm、6本
- ・青竹 L4.0m- ϕ 5 cm、120本
- ・杉皮 L1.0m、5束分
- ・荒縄 10mm/50m巻き、20巻
- ・棕櫚縄 4 mm、600m
- ・番線 # 8、15kg
- ・銅線 # 18、11kg
- ・その他 五寸釘、三寸釘

作業工程は、既設住居の解体後、1.

床面の掘削・土手成形、2.主柱建て込み、梁・桁取り付け、3.棟上げ、4.垂木取り付け、5.横木・横竹取り付け、6.屋根段葺き、7.板壁取り付けである。

資材は直接搬入し、丸太の切断や仕口にはチェーンソー・鋸、横竹の取り付けはドリルで穿孔後釘止め、ヨシを横竹と割竹で挟んで固定するには縄と銅線を併用するなど「文明の利器」を活用したが、アマチュア集団による復元作業は全体で約17日間、作業員のべ80人程度を要した。部材の規模や屋根の葺き方・厚み、作業者の熟練度など斟酌すべき事項は多いが、弥生時代において資材の調達や運搬、加工などの下準備に現在の数倍の手間と労力を要したことは想像に難くない。とりわけ葺材を刈り、切り揃える手間は現代の鉄鎌をもってしても並大抵でなかった。1棟の竪穴住居といえども、茅や板材の調達には幾秋冬を要し、建築には数日間、少なくとも数家族が共同作業を行ったものと推察される。

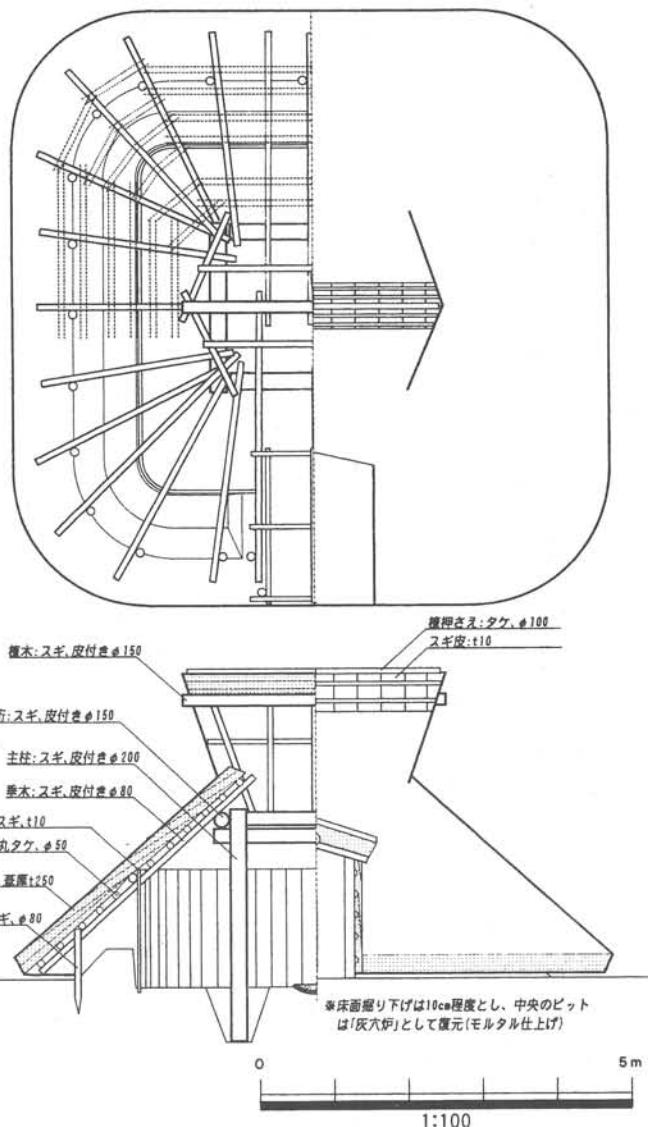


図1 弥生時代の復元住居 見取り図

2. 体験参加

第1日 2月10日(土) 9:00~12:00

場所：上牧小学校視聴覚教室、淀川河川敷

スライドとお話「弥生時代の高櫛」「弥生時代の暮らし」

体験「鵜殿のヨシの話と刈取り見学・体験」

道鵜実行組合の協力を得て、ヨシを鎌で刈り直径20cm弱の束に束ねる作業を行った。長さ2.5~3mあり、根元は押し切りで切り揃えた。

第2日 2月17日(土) 14:00~16:00

お話「弥生時代の住居」

体験「復元住居の基礎と骨組みづくり」

ロープを掛けて柱穴に主柱を建て込み、桁と梁を渡してから主柱を固定した。ついで梁・桁材を繋結のうえ、桁材に棟持ち垂木を差し掛けて又首を組み、棟上げを行った。

第3日 2月24日(土) 9:30~12:00

体験「鵜殿のヨシによる屋根葺き作業」

桁・梁に四方から垂木を差し掛けて番線で繋結、根元を杭で固定して横木・横竹をまわし屋根下地を完成したところで、児童が参加して屋根葺き作業に着手した。歩み板を杭を固定し、下端を揃えて均等な厚みになるようにヨシ束を並べ、割竹と下地の横竹とで強く挟んでヨシを固定する。

ヨシは堅く表面が平滑でなかなか締まらず、銅線止めのうえ荒縄を用いたが難渋した。2段目以降は桁などからロープを垂らして歩み板を固定した。

第4日 3月4日(日) 10:00~14:00

体験「板壁を取り付け住居完成、弥生時代の食事を再現」

当日までに棟廻りを除く屋根葺き作業をほぼ終えておき、現場合わせした杉板を上下2段、竹で挟んで固定して板壁をつくる作業を行った。これと並行して火起こし、復元土器による炊飯（玄米と白米）、炭火バーベキュー、貝汁などをつくり試食会を行った。

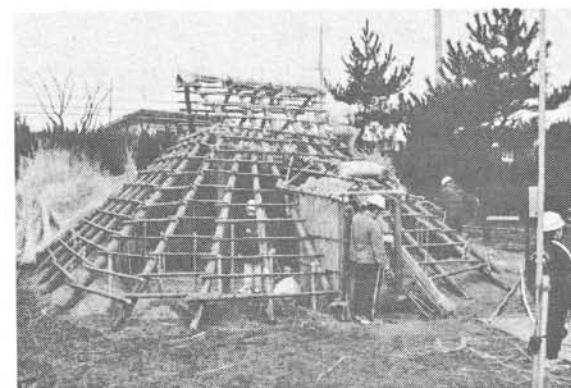
サヌカイト原石からの石器づくりや筒竹を割つ



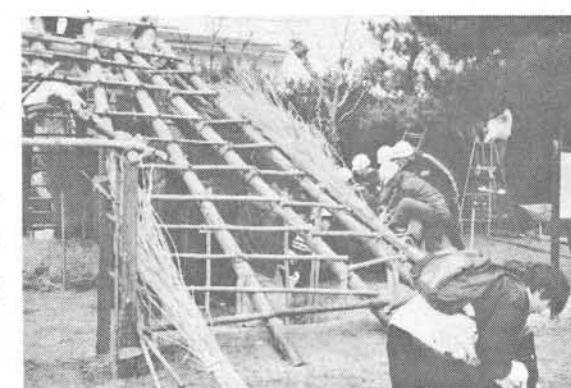
第1日 ヨシを刈り取る



第2日 主柱を建てる



第3日 骨組みの完成



第3日 ヨシを屋根に葺く

て先付けする竹串づくり、それに各自が石器で切った肉を刺して焼くなど、児童には楽しく新鮮な経験であったようである。終了にさいし、板壁に各自感想を記して体験参加の記念とした。

3. 参加者の感想

参加者からは初めての体験に驚きや喜びなど一様に好意的な反応が寄せられた。そのなかで寄せられた一文を掲載しておく。参加協力者は以下のとおりである。

飯尾 実、榎本康佐、大上恵子、大西祐宜、大仲秀治、大塚隆弘、木下勇作、篠原正俊、末廣義則、高木絹代、立石祐一、谷口正之、玉井聖幹、西田弘貴、溝口竜也、森 翔平、吉川直人、米澤征司（以上北大冠小学校）、池田理沙、池田一郎、池田智寛、井上公美子、梅本敬英、大田響介、大田英量、大塚菜緒、木村輝子、清川博貴、小山敦子、関 義郎、高槻直子、田和敬子、寺田祐子、中島理恵、西 英明、三好 遥、八尾千枝、山口泰弘、山下美抄子（以上上牧小学校）、アキコロム・アコシュ（ハンガリー・短期留学生）

『ぼくらの作った たて穴住居！』

篠 原 正 俊（北大冠小学校6年）

ぼくは、2月10日から歴史体験プログラムに参加しました。参加した理由は「多分いろいろ昔の事が分かるだろう。」と思ったからです。

そして……1日目、上牧小での説明会が1時間。その後はヨシ刈り。ヨシ刈りでは、カマを使い何本ものヨシを刈っていく作業を、何回もしました。とてもつかれたけれど、ヨシをうまく刈れたときは、とてもうれしかったです。

2日目、いよいよ埋蔵文化財調査センターでの作業。木の柱をたてたりしてとても楽しかったです。この日には、ほとんど土台ができあがりました。

3日目、ヨシをふく作業。かけ声をかけながら、ヨシを屋根に固定していきました。この日は、とても作業がすすみました。ヨシをそろえるために切っていく作業がとてもおもしろかったです。屋根の上からのながめはなんとなくよかったです。

4日目、いよいよ最終日。「サヌカイト」という石を使って、石のナイフを作りました。そのナイフで肉を切りました。火もおこしたりして最終日がやっぱり一番おもしろかったです。バーベキューもあつたし、はじめての体験ばかり。いろいろな事も学べてよかったです、とにかく楽しかったです。



第4日 石器や土器を使った調理体験